ショート・ホラー

短くて
ほんのり怖い

十怪

八瀬永太郎

ひといきで読める、

ショートホラーを十編

初盆の夜

「ねぇ、お化けと幽霊、どっちが良い？」

「ん？　どう違うの、それ？」

「ほら、足が無いのが幽霊でしょ」

「うそつけ～」

「いいから、どっちが好き？」
「う～ん、あえて選ぶなら…幽霊かな」
「んじゃ、幽霊～！」
いたずらっぽく笑った彼女は、生前と何も変わっていない。

事故

「仕方無いよ、事故だったんだから…」

そう、みんなが言ってくれる。

たしかに、どうしようも無かった。

雨の高速、いきなり飛び出した何か…。

思わず切ったハンドル。

仕方が無かった…。

でも彼女だけは、納得していない。

助手席から飛び出して、路面に打ち付けられた彼女。

その潰れた死顔で、今夜も俺を睨んでいる。

部屋

「おっ、良い部屋じゃん！」
…最初は、みんなそう言うのよねぇ。
「風呂も広いし！」
…たまに長い黒髪が、浮き上がるけどねぇ。

「おお！　ベランダからの見晴らしが最高！」
…ええ、紐を掛けてぶら下がると、もっとよく見えるわよ。

「えっと、不動産屋さん…」
「何も聞こえません。　気のせいですよ…」

妻

奥さん亡くなって、もう三年だろ？
そろそろ、再婚とか考えないのか？

実は、アイツが死ぬ時にさぁ…。
新しい奥さん貰っても良いよって、言ったんだ…。

…、出来た人だったものなぁ。

でさぁ…。

ん？

毎晩、同じこと言うんだよ。

えっ？

枕元に立ってさぁ…。

うざい男

「いくら口説いても、無駄だから…」
「俺の気持ち、判ってくれないのか？」
「いや、気持ちとか関係無いし…」
「ホントは、俺が好きなくせに」

「いや、大ッキライですから！」

「こうやって毎晩、俺の部屋で一緒に過ごしてるのに？」

「だからぁ～！　アタシは、ここの地縛霊だっつーの！」

左足

左足が、呪われているらしい。

父は事故で左足を挟まれ、車と共に焼け死んだ。

兄は左足を排水口に吸い込まれ、プールで溺れ死んだ。

俺を護る為に母は、祈祷の類に狂った。
呪いよりも、そんな母が怖かった。

やがて母は、シンプルな答えを見つけた。
今の母は、穏やかで優しい母だ。

俺は、義足にも慣れた。

電　車

終電には、まだ間がある。
車内は、そんなに混んでいない。
疲れた俺の顔が、窓に映ってる。

いきなり、通過駅の明るい光。
ふと見ると、ホームの端に女が一人。

長い黒髪が、うつむいた顔を覆って不気味だ。

それも一瞬。

また電車は闇の中へ。

窓には、俺の疲れた顔。

すぐ後ろに、長い髪が顔を覆った女。

幽霊話

ねぇ、西口の踏み切り。　出るんですって。

夜中に、白い服の女の子が立ってるって。

ほら、先月、あそこで女の子が亡くなったでしょ。

なによ…、信じないの？

でも、八百屋の奥さんも見たって…。

…うふふ。　ホントは、私も信じてないの。

だって幽霊が居るなら、とっくに出てるわよね…。

私は今夜も、この部屋でぐっすり眠るわ。

でも貴方は、床下で腐って、溶けて…。

ねぇ、もう骨になっちゃった？

お連れさん

お店に入ると、水やおしぼりを、二つ出されることがあるんですよ。

もちろん、こっちは一人です。

いつ頃からだったかなぁ…。

そりゃ、最初は気味が悪かったですよ。
でもね、もう慣れました。
店員が首をひねって不思議がっても、とぼけてやり過ごしてます。
ただ困るのが、ごくたまに、逆の立場になっちゃうんです。

つまり私の方が、相手を二人連れだと思い込んでしまうんです。

ふっと気が付くと、相手は一人なのに…。

さぁ…？　何でしょうね。

霊か何かなのか、錯覚なのか…。

まぁ、そんなことが、たまにあるんですよ。

そういえば、お連れさん、無口ですね…。

目撃

良いのかい、こんなとこで飲んでて。
だって、仲直りしたんだろ、奥さんと？
へへ、昨夜見ちゃったんだよ。
こっそり、家に帰ってただろ。

まぁ、とにかく、奥さんところに戻って良かったよ。
心配してたんだぜ、お前んちのこと。
どんな良い女か知らないけど、やっぱり最後は女房だぜ。
そこんところを…。
ん？
なに？

帰って無い？

なに、ムキになってんだ？

いや、見たって。

昨夜、コンビニに行った時だよ。

たしか夜中の一時くらい…。

なんだよ、その凄い目は…。

十　怪

著者・八瀬永太郎

２０１１年１２月１５日